

## 対蹠地の同時代作家の親和性 ——比較文学の新たな視座をさぐる——

武田 千香

### 1. はじめに

接触も交流もまったくない作家同士が書いた作品に明らかな親和性が認められるとき、それをどう解釈したらいいのだろうか。同じ人間だから、人間を扱う問題はやはり共通していると単純に片づけてしまってもいいものだろうか。マシャード・デ・アシス (Joaquim Maria Machado de Assis, 1839-1908) と夏目漱石(1867-1916)は、ほぼ同時代を生きたが、それぞれブラジルと日本という対蹠地に暮らし、おそらく兩人の間に交渉はまったくなかった。いや、兩人どころではない、おそらくは日本とブラジル両国の間自体が、その関係はまだ萌芽的なものであったにちがいない。なにしろ日本とブラジルが日伯修好通商航海条約を締結し外交関係を結んだのが 1895 年、互いの相手国に公使館を設置したのが 1897 年、日本からブラジルへ向けて移民が送られるようになるのはそれからさらに 11 年後の 1908 年のことである。こうした状況の中、両国間に活発な文学交流があったとは到底考えにくい。ところが、この二作家の作品には共通の何かが宿っている。二国間の文化交流が未成熟の段階であったばかりでなく、いずれの作家の作品も相手の言語どころか、双方の共通言語である英語にすら翻訳されていなかったにも拘わらずである。だとすればこの親和性は何を意味するのか。間テクスト性によるものでないとなれば、何かほかの理由に起因することになる。いったいこの理由とは何か。

こうした問いから始まったのが科学研究費補助金による共同研究「マシャード・デ・アシスと夏目漱石～対蹠地の同時代作家の近代化に対する共通意識～」〔平成 15 年(2003)度～平成 18(2006)年度〕であり、4 年間にわたって、夏目漱石に関する研究を柴田勝二氏が、マシャード・デ・アシスに関する研究を武田千香が担当し、各自それぞれの作家の作品に関して研究を進めてきた。本論はこれらの総括として、これまで各作家について個別に発表されてきた論文群に関する比較・考察を通して、両者の文学に現われる類似性の原因を同定しようとするものである。論考においては、本研究の成果として発表した論文のほか、「ソフィアの謎～『キンカス・ボルバ』のソフィア像についての一考察」<sup>1</sup>と『漱石のなかの〈帝国〉—「国民作家」と近代日本』(柴田勝二、翰林書房、2006)の第 1、3、4 および 8 章を対象とした<sup>2</sup>。

## 2. 近代国家を背負う主人公たち

これまでの研究を通してまず明らかになったことは、いずれの作家の作品においても登場人物が寓意性を纏って現われていることである。漱石の多くの小説の主人公たちには〈近代日本〉が仮託され、マシャードの後期の長編小説においても多くの場合、その主人公たちには〈近代国家ブラジル〉が重ね合わされている。もちろんそれぞれに当時の自国の政治社会状況の寓意性が認められるからといって、それがすぐに親和性につながるわけではなく、親和性が現われるのは寓意の現われ方に共通性があるからであろう。では、その現われ方のどこが共通しているのでしょうか。

### 2.1. 押し寄せる帝国主義の波

まず注目したいのは、登場人物同士の関係と国家の外交関係が重なりである。

#### 2.1.1 寓意化された外交関係

柴田氏が明らかにしたところによると、漱石は『それから』、『門』、『行人』、『こころ』の4小説を通して、当時進行していた日本をめぐる国際関係を作中人物の中に描き込んだ。4作に共通しているのは、いずれの作品においても男性主人公、その相手となる女性、そして、その間に介在するライバルという三角関係が設定され、どの小説でも舞台が家庭内に設定されているものの、その背後に日韓関係が焦点化されていることである。ここで主人公の男性は〈近代日本〉、相手の女性は〈韓国の領土〉、ライバルの男性は植民地化に抵抗する〈韓国の民衆〉を象っているという。日本は日露戦争が終わると、韓国に対しただちに協約を結んで保護国とし、1910年には日韓併合条約に調印させて植民地化した。この4作品にはそのプロセスがそれぞれの男女関係という暗喩を通して語られているというのである。『それから』では、日本の「韓国に対する支配力を強化し、自国の延長として扱おうとする〈能動的な〉姿勢が象られ、後に主人公の代助がライバル三千代の夫と絶交関係になる姿には、日本と韓国の完全な対立関係が重ねられているという。他方、次作『門』においては、宗助と御米がはじめから夫婦となって現われているが、これはこの夫婦関係に、この小説が連載された時点（明治43年3月から6月）ではまだ正式ではなかったものの、すでに動かしがたいものとなっていた日韓併合への流れが表象されているからである。御米を宗助に奪われた安井の名は、伊東博文の暗殺者の安重根の一字をとってつけられたもので、彼が大陸から帰還して二人を脅かす状況は、その暗殺事件をはじめとする韓国の反日行為を示唆している。主人公と相手の女性が夫婦として登場しているのは『行人』においても同様である。ただし『門』と異なるのは、女性の方の相手が「弟」というより近い人物に設定されている点で、そこにはまさしく併合後の日本と韓国の関係が想

定されている。すなわち次郎は弟という従属的な立場に留まりながら、一郎を脅かし続ける。そして、妻の心がなかなか読めない一郎は、表面的には恭順の姿勢を示しながらもなかなか「日本人」にはなりきらなかった韓国の人びとを理解できない〈近代日本〉に相当する。一郎は、周囲を侮蔑するような傲慢さゆえに孤立感を強めていく。ここには日露戦争後、アジア諸国において帝国主義国として勢力を拡大するにつれて西洋諸国とも緊張関係を高め、日本の成長を脅威と見ていた国際社会の中で浮いた存在となっていく〈近代日本〉の立ち位置が表象されている。一人の女性をめぐる三角関係に日韓関係を投影する仕掛けは『こころ』においても踏襲されている。ここでも〈近代日本〉は「先生」で、Kが〈韓国の民衆〉、お嬢さんが国土としての〈韓国〉という構図が成り立つ。したがって「先生」が自分の思いをお嬢さんに伝えることなく母親に結婚の許可を申し出たことは、韓国民衆の希求を無視して韓国を属国化しようとする日本の振る舞いと重なる。最後に「先生」が自殺に追い込まれるのは、「先生」に仮託されているのがあくまでも〈明治の日本〉であるため、〈新しい時代の日本〉の到来とともに生を終える必要があったからである。そして、その〈新しい時代の日本〉こそが「私」だというのである。

このように漱石の主要な4作品には、当時の近代日本が歩むことになった日韓関係の軌跡が寓意という形で織り込まれている、と柴田氏は述べる。マシャードの場合はどうか。外交関係が寓意として作品に表われるのはマシャードの作品についても同様である。例えば短編「歳月のずれ」には明らかにその手法がみられる。父親の選んだ女性シリーラとの結婚生活から逃げ出したエウゼビオは、ウルグアイ人のロジッタのもとに走ったが2ヶ月しかもたず、パラグアイ戦争に出征する決心をし、復員後、今度はアルゼンチン人のドロレスと激しい恋に落ちる。しかし、結局は別れて元の妻の許へ戻るといふこのストーリーは、パラグアイ戦争前後の、ウルグアイ、アルゼンチン、ブラジルをめぐる外交関係と並行関係にある<sup>3</sup>。また、『ドン・カズムーホ』における「姦淫」は、旧約聖書の「エゼキエル書」との連想において、イギリスをはじめとする大国の外圧に翻弄され、それにおもねながらも、南米大陸の覇権争いでは、情勢に応じて組む相手を変えたブラジルの大国迎合主義的外国政策に通じる<sup>4</sup>。

### 2.1.2. 自己内面化された帝国主義

こうした両国の海外侵略がまさに当時世界的に拡がり、全盛期を迎えていた帝国主義の自己政策化であることは言うまでもない。日本は開国前の江戸末期にすでにアメリカ、イギリス、フランス、オランダの干渉を受け、長州藩や薩摩藩はこれらの国々を相手に一戦を交えている。『坊ちゃん』の「親譲りの」「無鉄砲さ」とは、自分の実力もわきまえず西洋諸国へ挑んでいく姿を、〈明治の日本〉も受け継いでいることを指しての表現だという指摘は興味深い<sup>5</sup>。西洋列

強から受ける外圧を迎え撃つ方法として日本が選択したのは、自分たちもその政策を自己のものとして取り込み、海外侵略を行なうことだった。ところでこの有様はまさにマシャードが『プラス・クーバスの死後の回想』において寓意化したことではなかったか。『プラス・クーバスの死後の回想』は一見、一般の人間社会がいかに弱肉強食であるかを描いたもののように見えるが、主人公のプラス・クーバスを、ナポレオン戦争に端を発した帝国主義的妄想にとりつかれた当時のブラジル（そして、その他の南米の国々）に見立てた存在として捉えれば、この小説は一転して、地球規模で猛威を振るう帝国主義に侵蝕された当時の世界そのものを表象しているものとして読める<sup>6</sup>。奴隷の身分から解放された後は、自らも奴隷を購入し、かつて自分が受けた仕打ちに利子をつけて返すかのように、むごい鞭打ちを加えるプルデンシオの挿話は、そうした帝国主義の自己内面化の実態をよく物語っている。

では、このような行為の後には、何が残されたのであろうか。その不毛な結果の象徴が、『門』の子どもにない宗助と御米夫妻の姿だという<sup>7</sup>。御米は三度身ごもるが、すべてが流産か死産に終わり、結局夫婦は子宝に恵まれない。御米はこのことを易者に相談した。そのときに言われたのは「貴方は人に濟まないことをした覚えがある」という言葉で、その「人」に対してなされた「濟まないこと」が明らかに韓国という「人」の国を植民地化することを示唆していると柴田氏は解釈する。「一見下級官吏の穏やかでつましい日常を語っているように見えるこの作品が、実は近代日本の進み行きに対する辛辣な批判をはらんでいることが分かる。そこには〈西洋化〉の浸透のなかで、日本が本来とるべきでなかった方向に進んでしまっているという漱石の認識が込められている」<sup>8</sup>のである。

マシャードの場合はどうだったか？ 自国がパラグアイから攻め入られていたときには愛国心に燃え、声高に敵国のロペス大統領を批判したが、あろうかことか、ブラジルは三国同盟を組んでパラグアイに宣戦布告した。そうした事態に対するマシャードの思いは、彼の時事評論と、短編や『ヤヤ・ガルシア』に表われる主要人物のせりふから想像することができる。彼は、その三国同盟の締結を境に、新聞紙上でのパラグアイ戦争に関する論評をやめている。しかも、ブラジルにとって戦争の発端となったウルグアイ干渉は、あくまでも同領土内で危害を加えられた同胞を救うためだったにすぎないと、ブラジルの参戦に対する何やら弁明ともとれる発言を残しての停止であった。『ヤヤ・ガルシア』のパラグアイ戦争に出征した主要人物のジョルジは、戦いの中に「自国の正当なる栄光とともに人間同士の救いようのない衝突を見」て人生観を変えたというし、短編「ある義勇兵の大尉」の主人公はパラグアイ戦争に熱狂できない理由について「そりゃ、ソラーノ（当時のパラグアイの大統領）がマルケス・デ・オリンダ号を拿捕したときは腹が立ったさ。だけどそれもすぐ消えたね。今は、正直なところ、我々は逆にロペスと同盟を組んでアルゼンチンを相手に戦っていた方がはるかによかったと思うね」と語る。

もちろん作品の中の記述を著者マシャードの意見として読むことは禁物であるが、少なくともマシャードの頭の中に、ブラジルはアルゼンチンと組んでパラグアイを戦うのではなく、パラグアイと組んでアルゼンチンと戦うべきだったという発想が存在していたことは確かで、そこにはパラグアイ一國を相手にアルゼンチンとウルグアイと組んで弱い者いじめをしたような気持ちが無かったとはいえないのである。猛批判をしていた西欧の帝国主義を自己政策化し、自分よりもさらなる弱者にその仕打ちを加えている祖国の状況を目の当たりにしたとき、もしかしたらマシャードは極度の幻滅を味わったのかもしれない。三国同盟を結んだ翌日を以て、この戦争に関する新聞上の論評を停止した背景にはそうした思いがあった可能性があるのである<sup>9</sup>。

19世紀後半から津波のように次々と辺境を侵蝕していった帝国主義。地球規模で広がるこの世界システム構築の動きに、その波をかぶった側が何の関与もせずは無視を決め込むことは不可能であった。「非西洋」が、最初に近代化に乗り出した「西洋」のペースに吞まれ、その餌食となることだけは回避したいと思ったら、自らも転じて攻勢に出るしか方法が無かったのかもしれない。とはいえ、それは理性ある人間にとっては許し難い行為である。日本とブラジル両國の帝国主義的拡張を寓意として小説に描き込んだ漱石とマシャードには、このような共通の批判精神があったにちがいない。

## 2.2. 近代化に翻弄される主人公たち

これまで見てきたような「西洋」の「非西洋」への植民地主義的進出は、たしかに「近代化」の重要な側面であるが、「近代化」の波が及んだのは何も外交面ばかりではなかった。当時の明治政府が「文明開化」というモットーを掲げたことからわかるように、「文明化」こそが二國の重要な課題のひとつであった。この中には自由主義思想の普及や工業主義社会への移行、資本主義の浸透なども含まれる。これらの「近代化」への反応はどのように描かれているのだろうか。

### 2.2.1. 近代国家の未熟性

急速に迫られる近代化に対し両國がとった対応への意識についても、両者は共通している。明治の近代日本に対する漱石のイメージがもっともよく表われるのが「坊っちゃん」という呼び名であろう。柴田氏は、「坊っちゃん」という表題は「語り手の坊っちゃんが積極的に選んだものではなく、むしろ外側からメタレベル的に与えられた性格を持つ」こと、したがってそれは「主体的な自己認識を自身に与えることができず、対他者的な関係において未熟さを示し続ける主人公の輪郭こそが、漱石の捉える〈明治日本〉のイメージ」だと述べ、そこに日本の近

代国家としての未熟さに対する漱石の批判的視点が表われているとする<sup>10</sup>。明治になってからすでに40年を経てもなお近代国家として未成熟な日本を漱石は憂慮していたのである。こうした日本の開化に関して悲観的な展望しか持ち得なかったのは、西洋の開化が内発的であったのに対し、日本の開化は外発的だったという意識が漱石にあったからであり、このことは「現代日本の開化」という講演の中の一節「日本の現代の開化を支配している波は西洋の潮流で波を渡る日本人は西洋人でないのだから、新しい波が押し寄せるたびに自分がその中で食客をしてい兼ねをしているような気持ちになる。(…)自分はまだタバコを吸ってもろくに味さえわからない子どものくせに、タバコを喫ってさもうまそうな風をしたら生意気でしょう」という言葉にもよく表われている<sup>11</sup>。

おそらくはマシャードも同じようなイメージを近代国家ブラジルに対しても抱いていたのではないか。というのも『ドン・カズムーホ』の主人公は、本来の名前がベント・サンチアゴであるにも拘わらず、「ベント」という名前が用いられているのはたったの二度で、あとはもっぱら「ベンチーニョ」という愛称で呼ばれているからである。「ベンチーニョ」という形は「ベント」に-inhoという指小辞がついた形で、一般には「小ささ」や「愛情」を表わし、とくに子どもに対してよく用いられる。したがって「ベンチーニョ」としてしか扱われないベントはずっと一人前の大人として接せられず、子ども扱いをされているような印象を与えるのである。しかもその二度というのは、カピトゥが壁に書いた名前と乞食に金を恵んでやったときに相手から呼ばれた名前であり、いずれも愛称が使いにくい場面なのである。ジョン・グレッドソンは『ドン・カズムーホ』の年号設定やベントの性格や社会的身分を分析し、ベント自身は第二帝政時代のブラジルを表象していると見ている<sup>12</sup>。物語の中でベントは自己認識が希薄で、自分で考えたり決断したりすることができず、常にカピトゥや母親や食客のジョゼ・ディアスに頼りっきりの少年として描かれているし、時代の流れに乗れず、当時ですらほとんど使われなくなった馬車に好んで乗るなど、旧式へのこだわりも強調されている。これを寓意的に解釈するならば、ベントは「前近代」からなかなか脱皮できず、自己すら確立できない未熟な子どもということになる。このことは「坊っちゃん」と「ベンチーニョ」に共通する点である。「ベンチーニョ」にもやはり、近代化を急ぎながらもなかなか達成できないブラジルの姿が映し出されていると考えてもいいのではないか。

### 2.2.2. 皮相上滑りの近代化

「前近代」から「近代」への移行期において社会は「前近代」的な要素と「近代」的な要素が入り交じったものとなるが、劇的な転換を半ば強いられた日本やブラジルの場合、とりわけその度合いは強かったと思われる。『三四郎』に描かれているのはまさにそうした近代日本の状況

である<sup>13</sup>。三四郎は上京する汽車の中で、次第に「女の色が次第に白くなる」ことに気づく。「黒」から「白」への変化は、「地方」から「中央」への変化であり、同時に日本が経験してきた「前近代」から「近代」、さらには「非西洋」から「西洋」への移行の暗喩である。ところが、近代化されていると期待した東京も、住んでみれば必ずしもみな「白い肌」をしているわけではなく、「白」と「黒」が混在する場所で、野々宮先生の研究室が「穴蔵」にあることに代表されるように多くの登場人物が「暗闇」に住んでいた<sup>14</sup>。明治の日本社会は「前近代」と「近代」が混在し、当時の日本人はその両者の間で引き裂かれていたのである。近代化を急ぐあまり外面は繕えても、なかなか内実が伴わないそのような近代化を、漱石は「皮相上滑りの開化」と呼んだ。この「外と中の乖離」は漱石の作品においていくつかの挿話によって描かれている。たとえば『門』において、宗助が歯病で歯医者にかかったとき、医者は中が「エソ」に罹り「丸で腐って」いるため治癒不能だと告げる。また『明暗』の冒頭で、主人公の津田が痔の診察の際に、医者が肛門から中を覗く場面も、登場人物の身体に託される〈中が病んでいる〉というイメージだという<sup>15</sup>。

そして大変興味深いことに、それと同じイメージがやはりマシャードの作品でも用いられている。『エサウとヤコブ(*Esau e Jacó*, 1904)』に出てくる「インペリオ(「帝国」の意)」という名前の菓子店を構えるクストチオは、看板が汚くなったので、塗り替えるように周囲から勧められ見積もりをとらせた。すると看板はもう古く、中が傷んでいるのでいくら塗り替えても仕方がないから新調する必要があると言われたのである。だが、運の悪いことにちょうど帝政が崩壊してしまい、店名の変更までを検討する必要が出てくることになる。後述するがブラジルの帝政期、とくに第二帝政期はブラジルの近代化をもっとも推し進めた時代に相当する。その名称を持つ菓子店の看板が、中が傷んでいるためペンキを表面に塗っても仕方がないという挿話は、言うまでもなくマシャードがブラジル帝国に対して抱いていたイメージだと考えられる。しかも、『エサウとヤコブ』は、近代国家ブラジルの建国神話として仕立てられながら、国の将来を託された女性フローラも、母胎である大地母神が仮託されたナチヴィダーヂも早死にさせられてしまうストーリーを持つ小説で、そこにはマシャードの近代国家ブラジルの現状と将来への悲観的展望が込められているとみていい<sup>16</sup>。したがってここにも、近代化を急ぐそれぞれの出身国に対する両作家の共通意識がみてとれる。

### 2.2.3. 急速な近代化の果てに

こうした内実の伴わない近代化を急いだ結果、どんな事態を引き起こしたと漱石やマシャードは認識していたのだろうか。漱石は「現代日本の開化」の中で「こういう開化の影響を受ける国民はどこかに空虚の感がなければなりません。またどこかに不満と不安の念を抱かなければ

ばなりません」と述べ、さらにこう続ける。「西洋が百年かかってようやく今日に発展した開化を日本人が十年に年期をつづめて、しかも空虚のそしりを免れるように、誰が見ても内発的であると認めるような推移をやろうとすればこれまだ由々しき結果に陥るのであります。百年の経験を十年で上滑りもせずやりとげようとするならば年限が十分の一に縮まるだけ我が活力は十倍に増やさなければならぬのは算術の初歩を心得た者さえたやすく首肯するところである」。『それから』には、主人公の代助がまさに同じことを語る場面がある。「(日本は)無理にも一等国の仲間入りをしようとする。だから、あらゆる方面に向かって、興行きを削って、一等国だけの間口を張っちまった。なまじい張れるから悲惨なものだ。牛と競争をする蛙と同じ事で、もう、君、腹が割けるよ。その影響はみんな我々個人の上に反射しているから見給え。こう西洋の圧迫を受けている国民は、頭に余裕がないから、ろくな仕事はできない。ことごとく切りつめた教育で、そうして目の回るほどにこき使われるから、そろって神経衰弱になっちゃう」(六)。『行人』の一郎はまさにその「近代日本の開化のきしみを、個人的意識の連続性のなかでとめどもなく微分しつつける存在であり」、彼に担わされた寓意性は明らかで、そこには漱石が同時代の日本に対していただく問題意識が集約的に託されているのである<sup>17</sup>。

漱石の作品における「神経衰弱」は、マシャードの作品においては「狂気」という形で現われている。『キンカス・ボルバ』の主人公フピアオンにはやはり帝政期のブラジルが重ね合わされている。急速な資本主義化の波に晒されて、周囲の人びとに搾取されて財産を巻き上げられ、挙げ句の果てに狂気に至るその有様はブラジルの近代化のひずみの象徴でもある。グレッドソンはフピアオンの狂気について、「おそらくマシャードは、進歩・自由・平等を望む一方で、コーヒー・ブームと奴隷制の恩恵を享受し続ける国家の下意識をフピアオンに象徴させたかったのではないかと推測する<sup>18</sup>。そして、そこには「近代的な」思想を信奉しながらも、旧体制のシンボルともいえる奴隷制度を容認するブラジル社会、奴隷制度の廃止を論議しながらも、やはり廃止されては困るという相矛盾する気持ちを抱くブラジルの自由主義者の姿が投影されていることを指摘している。こうした「近代」と「前近代」の狭間の中で、そのひずみに耐えきれず、フピアオンは狂気に至らざるを得なかった。一郎とフピアオンの精神の病は、近代化という怪物の餌食になった結果だったのだろう。

### 3. 共通する両国の地政的・社会的状況

以上のことから明らかになるのは、マシャード・デ・アシスの作品と、夏目漱石の作品のいずれにおいても、近代化を早急に進める各々の国の寓意性を纏い、そのひずみを一手に引き受け苦悩している作中人物たちの姿である。したがって、両人の作品間に流れる親和性の源流はここにこそ求められるべきだろう。交渉がまったくなかったと思われるにも拘わらず、それぞ



れの国の社会を書き込んだ二人の作家の作品に共通点が多いのは、おそらくは両国の置かれていた地政的・社会的状況に類似性が認められるからではないだろうか。ここで当時の両国の状況に目を移してみよう。

### 3. 1. 眠りから覚めた国々

ブラジルが旧宗主国ポルトガルから独立を果たしたのは 1822 年である。これを以て正式な一国として国際社会の仲間入りを果たすのだが、事実上の国際デビューはそのさらに前、それから 15 年遡った 1808 年のことだったと言っていい。というのも、同年にポルトガル王室がナポレオン戦争を逃れてブラジルに渡ってきたために、ブラジルはいきなり植民地から宗主国へと正反対の立場に置かれることになったからである。1815 年には連合王国へ昇格、これ以降、西洋並みの一等国の体裁を整えるべく近代化政策を強力に推し進めることになる。ポルトガル王室の到来以前は印刷や出版が禁止され、港も閉ざされていたブラジルは、事実上世界の他の地域と絶縁状態にあった。それがこれを機にいきなり文明国への道を歩み始めたのである。言ってみれば、1500 年にブラジルが“発見”されてから 300 年以上の永き眠りを一気に覚まされたようなものだった。

このイメージはまさに『三四郎』の「うとうととして目が覚めると女は何時の間にか、隣の爺さんと話を始めている」という冒頭の一文で使われているものに通じる。三四郎が東京帝国大学に入学すべく、熊本から汽車を乗り継いで東京へ向かう汽車の中の場面である。三四郎は、すでに述べたように「近代日本」の暗喩として登場し、この上京という空間的移動には「前近代」から「近代」という時代的移行が、寝覚めというイメージには永い鎖国の時代から開国へ踏み切った史実が重ね合わされている。つまり外からの働きかけによって突然国際舞台に登場させられ、容赦なく押し寄せる近代化の波に洗われながら、内実も伴わないまま外面だけでも文明国を繕うべく躍起にならざるを得なかったのは日本もブラジルも同様だったのである。

1822 年のブラジルの独立は、摂政としてブラジルに残されたブラジルの皇子ペドロを（父のジョアン 6 世は 1821 年にポルトガルへ帰還していた）、現地の支配者層がペドロ一世として担ぎ出して達成されたもので、これを以てブラジルには帝国政府が樹立される。しかし、皇帝の専制的性格や国内のポルトガル派とブラジル派の分裂、相次ぐ国内の反乱といった理由によりペドロ一世は 1831 年、退位を余儀なくされ、当時まだ 5 歳であった息子のペドロ・デ・アルカンタラを残してポルトガルへ帰国してしまう。帝位を継承できる適当な人物が皇帝家に見あたらなかったことから摂政が選出され、しばらくは摂政政府によって統治される。しかし、求心力は広い国土に及ばず、相変わらず地方では反乱が頻発し、国内の情勢は安定しない。そこで解決策として選出されたのが、ペドロの成年を繰り上げ、正式の皇帝を擁立するという方法

だった。1840年、若い15歳のペドロ二世の即位とともに第二帝政時代が開始する。折しもブラジルではコーヒー産業が拡大し、コーヒーはブラジルの最大の輸出品となり、ブラジル経済は強力な原動力を獲得した。ブラジルの近代化はこの富に支えられ、猛烈な勢いで進められることになる。さらには1850年に奴隷貿易が禁止されると、それまで奴隷の輸入に向けられていた資本が新たな事業に投下されるようになり、ブラジルは1850年代から1860年代にかけて目覚ましい発展を遂げ、リオデジャネイロはその中心地として近代都市へと脱皮を図る。1854年にはリオデジャネイローペトロポリス間で、ブラジル初の蒸気機関車が導入され、ガスによる照明が開始している。

このように日本もブラジルも永き眠りからいきなり叩き起こされ、有無を言わず無我夢中のうちに近代化レースに引き込まれた。関心を引くのは、その際に両国が若年の皇帝をシンボルに頂いたことである。先述したようにブラジルは近代化が本格的に始まる第二帝政を開始するにあたっては、15歳のペドロ二世を戴冠させた。新生の近代日本を統べたのもやはり15歳で即位した明治天皇だった。双方とも幼い皇帝を掲げて国民統合を図り、近代的国民国家を打ち立てようと躍起になったのである。

### 3.2. 「越境」を経験した二人

夏目漱石が生まれたのは、その新生国家が誕生する明治維新の前年にあたる1867年、江戸牛込馬場下横町でのこと、東京がまだ江戸と称する時代であった。そして、興味深いことにマシャード・デ・アシスも、第二帝政が開始する1年前の1839年に、帝都リオデジャネイロで生まれている。ブラジルの帝政は1889年に崩壊し、その後は共和政となるが、マシャードはこの激動の時代を生きることになる。そして、一方の漱石も明治、大正という二つの時代を生き抜いている。柴田氏は「夏目漱石の辿った軌跡の中には、様々な〈越境〉が刻みつけられている。そこには幼少期からの家庭環境、職業的な位置、それに伴う生活の場所といった、私的な次元における空間の移動としての〈越境〉に、江戸から明治、大正、あるいは19世紀から20世紀という、日本と世界が経ることになる時間的な〈越境〉が折り重ねられ、さらにそのなかで推し進められていった、日本を含む世界の〈強国〉がおこなう空間的拡張としての〈越境〉が、そこに加わってくることになる」<sup>19</sup>と述べているが、これはまさしくこのままマシャード・デ・アシスに当てはまることでもある。

すでに述べたようにマシャードも革新の前年に生を受け、第二帝政から共和政へ、19世紀から20世紀へという「時間的な〈越境〉」と、「世界の〈強国〉がおこなう空間的拡張としての〈越境〉」を経験したばかりでなく、やはり家庭的および職業的〈越境〉を味わい、さらに彼の場合には社会身分的な〈越境〉をも経験している。というのも（ここが漱石と異なる点ではあ

るが) 彼の出自は貧しく、生まれたのは母親が縫子を務めるある男爵夫人の敷地内で、父親は解放されたアフリカ人奴隷の子どもであった。すなわちマシャードは黒人の血を濃厚に引いていたのである。12 歳のときに母親を亡くし、しばらくは継母のもとで暮らしたものの、15 歳のときに父親が亡くなってからは、一人でリオデジャネイロの中心街に出る。パウラ・ブリットの経営する書店(当時は印刷所や出版社も兼ねていた)に勤務するようになり、そこで多くの文人や知識人と親交を深め、文芸活動にも関わり始める。その後はジャーナリストとして新聞社に勤め、1864 年にはまずは詩人として文学界にデビューする。文壇での活躍は目覚ましく、1870 年代にはすでによく知られる存在となり、1897 年に「ブラジル文学アカデミー」が創設されたときには初代会長に選ばれている。貧しいムラート(黒人と白人の混血)に生まれながらも、ブラジル文学界の頂点に登りつめたわけである。このようにマシャードは家庭環境および職業的な位置の〈越境〉、そのうえさらに「人種的」および「社会身分的な」〈越境〉も果たしているのである。

### 3.3. 同土意識と将来展望

こうして見ると、いずれの作家も、祖国が近代国家へと成長していくのと同時進行で、それぞれの人生の齢を重ねていったことがわかる。マシャードが自らの成長をブラジルのそれに重ね合わせたり、あるいはその逆を行なったのではないかという指摘は、アストロジルド・ペレイラもしている<sup>20</sup>。もともと国や地域の歴史を寓意化してテキストに書き込むことは、旧約聖書を初めとして西洋文学において伝統的に行われていたことである。マシャードが自らと同じように急成長を遂げる祖国の歩みを作品の中に描き込もうとしても、それは至極当然のことで、ブラジル近代国家の黎明期に、マシャードのような作家が登場したことも自然なことなのかもしれない。また、漱石に関して柴田氏は「漱石にとっては、国や社会の問題を考えることと、文学の問題を考えることは完全に地続きであり、とくに『文学論』では前景化されていない、個人的意識としての“f”を社会の習合的関心としての“F”に連続させる着想は、漱石が作家となって以降の作品群を還流する基底をなすことになる。ほとんどの場合、主人公たちは〈近代日本〉を寓意する側面をはらんで登場し、その行動や内面の揺れに託す形で、日本の現況に対する漱石の批判意識が形象されていく」と述べている<sup>21</sup>。まさに同じような地政的状况に置かれていた日本とブラジルに生きたこのような二人の作家であればこそ、何の交流もないままにそれぞれの文学を築き上げながらも、そこに共通の意識が通底していたとしても何の不思議もないだろう。

ただ、マシャードの場合、自分の成長は順調でも、祖国ブラジルの展開は問題の多いびつなものとして捉えていたようである。彼の文学に書き込まれた将来展望は、徹底して悲観的で

ある<sup>22</sup>。『ドン・カズムーホ』において、旧約聖書の「エゼキエル書」と関連づけてブラジルの将来が託された二人のエゼキエルは夭逝しているし、建国神話仕立ての『エサウとヤコブ』では先述したように、やはりブラジルの将来を表象するフローラばかりか、ブラジルの大地を象徴する地母神ナチヴィダーチまでがあっけない病死を迎えている。『メモリアル・デ・アイレス』もやはり主要人物のトリスタン、フィデリア、カルモ夫妻に、それぞれペドロ二世、皇妃イザベル、リオデジャネイロの都市中間層が重ね合わされ、19世紀後半のブラジル社会の寓意小説となっているが、最後はトリスタンとフィデリアがポルトガルへ去り、寂しく展望もなくブラジルに取り残される老カルモ夫妻（リオデジャネイロの都市中間層を表象）の姿が映し出されて終わる。そこにはもはや批判精神すらなくしたマシャードのやるせない思いがうかがえる。

一方の漱石はどうであったか。柴田氏は、漱石の未来に向かう積極的なヴィジョンを『坊っちゃん』や『門』、それから『こころ』に認めている<sup>23</sup>。ただそうした未来志向は、日本が第一次世界大戦に参戦したことで、結局は新しい時代である大正も、明治と同質の時代として展開されるであろうことが明らかになった時点で修正を加えられ、その転換は『明暗』に表われているという<sup>24</sup>。

どうやらいずれの作家も結局は両国の近代化に対しては厳しい批判の眼差しを向けたようだ。だが、漱石の方がたとえ一時でも明るい未来のヴィジョンが持てたことは注目に値する。しかも、「坊っちゃん」が東京に戻ってきてから「街鉄の技手」になったのには、産業技術による立国を示唆している可能性があるという<sup>25</sup>。たしかに日本はその後、軍国化の道を選び、二度の世界大戦に参戦したあげく悲惨な結果を招くことになり、漱石はその緒に遭遇したことにより明るい展望を見失ったかもしれない。とはいえ第二次世界大戦後の日本の復興ぶりは目覚ましく、しかもその武器となったのが産業技術であったことを考えると、「街鉄の技手」になった「坊っちゃん」が主人公の小説『坊っちゃん』に明るい展望を託した漱石のヴィジョンは決して間違っただけではなかったとも言えるかもしれない。

#### 4. 比較文学の新たな視座の可能性を探って

本研究では、近代化の現象の中でもとりわけ西洋の帝国主義的拡張に焦点を当てた。しかし、近代化をめざすプロセスには、急速な資本主義社会の発展や、進化論をはじめとする自然科学主義思想の浸透など、それ以外にもさまざまな側面があり、当然のことながら両作家もこれらを題材に取り入れている。一見青春の淡い恋物語仕立てになっている『三四郎』にも、実は世知辛い金銭の貸借関係が仕掛けられていることは小森陽一氏が指摘しているし<sup>26</sup>、恩情や信仰、人間関係が金銭関係に置き換えられる例はマシャードにもある。マルセーラという女性に惚れ込み、さんざん金品を買いだブラス・クーバスは、その経験について「マルセーラはわたしを

十五ヶ月と十一コント・レイス分愛してくれた」と語り、『ドン・カズムーホ』ではベントが信仰を介在とした神との関係が、やはり金銭の貸借関係に結びつけられている。愛情や恩義といった人間関係までが金に換算されてしまう状況は、あらゆる領域においてモノやコトがすべて商品化されてしまう産業資本主義社会の最大の特徴であり、ブラジルは独立とともに、日本は開国とともに産業資本主義が中心となった世界システムに組み込まれていく。そのときの変化を、両作家はいずれも作品に書き込んでいるのである。そして、そうした認識は作家それぞれの生い立ちとも関係があるのかもしれない。というのも漱石の場合は、一度塩原家に養子に出され、その後金銭と引き替えに実家に復籍した経験があるだけに、そのような問題には敏感であったであろうし、マシャードの場合は、自らの祖父が金銭で売買される奴隷であったのだから、とうてい見過ごすことのできないテーマであったにちがいない。

さらに二人の作品は「子どもがいない」というモチーフでも共通している。いずれの作品にも、子どもの有無へのこだわりがあるのである。『それから』の代助と三千代には子どもがいない、『門』の宗助と御米夫妻は、三度の流産と死産を繰り返す、もう子どもは授からない運命にある。さらに『こころ』の「先生」にも子どもがいない。マシャードの作品でも、子どもがいないか、いても数が少ない夫婦が多いことは多数の論者によって指摘されている。『プラス・クーバスの死後の回想』では、この世に子どもを遺さなかったことが唯一の「人生の黒字」だったとされているし、『メモリアル・デ・アイレス』のアギアール夫妻は子どもに恵まれず、それが主題化されている。『ドン・カズムーホ』のベンチーニョは一人っ子で、家は危うくベントが神父になって断絶に追い込まれるところだったし、結局は結婚したものの、唯一設けた子のエゼキエルも20歳前後で早世している。漱石がこのモチーフを好んだ理由としては、家督相続を巡る問題へのこだわり<sup>27</sup>や「優生学」に通じる「進化論」への懐疑<sup>28</sup>などが挙げられている。マシャードも進化論をはじめとする自然科学主義思想に対して否定的であったことを考えれば<sup>29</sup>、マシャードがこのモチーフを用いたこともそれと関係があろう。

そして、この二人にはいずれもそうした懐疑を抱く理由があった。なぜならば兩人ともが、当時流行した進化論的人間観からみれば「不適格者」だったからである。すでに述べたようにマシャードは一見してすぐにそれと知れるムラートで、しかも、当時の常識では遺伝病と考えられていたてんかんを持病として患っていた。遺伝病を受け継いだ人間は生存に適さないと考えられていた時代である。さらに妻の兄は狂死している。その頃は精神病も遺伝によるとみなされていたため、狂人を出した家系の人間は「不適格者」と思われても不思議ではないはずである。だから子どもが持て（た）なかった可能性はある。一方極端な欧化政策がとられていた日本でも、社会進化論が「開化」という名前で半ば強迫観念のように人々に暗い影を落としていた。イギリスへ留学したときに漱石は黄色人種に対する差別意識を感じていたし、身長もイ

ギリス人より十数センチ低いうえ、彼の顔には種痘の失敗によって罹った天然痘の痕跡があった。種痘によって生き延びた人びとは、ダーウィンからは文明の力で生き残った「不適格者」の典型として挙げられている。当時の先端的な科学の犠牲者になった漱石は、徹底して科学万能主義への批判的な姿勢を貫き、『吾輩は猫である』は科学に対する嘲笑と揶揄に満ちている。

このように考えると、両作家の作品に横たわる親和性は明らかであり、二人が生きた時代状況や描き込んだ社会をみればそれも当然のように思えてくる。すなわちまったく交渉を持たず、地球のまさに対蹠地で活躍した二人の作家に類似した作品を書かせたのは、両国が置かれていた地政的状况ばかりでなく、当時ヨーロッパから発信されていた西洋中心的な近代主義の煽りを受けた日本とブラジルに共通する国際的な状況と近代化のプロセスそのものだったのだろう。

ヨーロッパの近代は通常 16 世紀から 18 世紀にかけて訪れた第一期と、19 世紀にイギリスとフランスが中心となって推し進めた第二期に分けて考えられるのが一般的である。第一期は理性の力が認められ、市民社会が創出されることによって、その前の宗教的な束縛や呪術的な締めつけを被っていた社会が解放されるという肯定的な効果の方に注目されるのに対し、第二期には、その結果登場してくる産業資本主義の拡大や国民国家の成立により、その否定的な側面にも目が向けられた。自由の理想を掲げ、豊かな「文明」を武器に、ヨーロッパの帝国国家は欲望と利益を優先して世界を荒らし始めた。日本やブラジルが国際社会に門戸を開いたのは奇しくもそういう時代だったのである。「文明」に憧れ、ヨーロッパ「近代」を目標にする日本やブラジルにとって「近代化」は強迫観念のようにすらなっていた。そして、その「近代化」は、ときには「工業化」、ときには「自由主義化」という看板を掲げてはいたものの、それは「ヨーロッパ化」以外の何ものでもなかった。日本はそれまでの地方分権的な体制を排し、ブラジルはそれまでほとんど国内連携の体制がなかったところへ強力な中央集権を推し進め、軍事力を強化し、海外をも侵略の射程に入れた。これはまさに 19 世紀ヨーロッパの犯した帝国主義という罪と同じ轍を踏むものだった。これこそが『プラス・クーパスの死後の回想』に描かれている姿である。

19 世紀のそうしたヨーロッパの列強勢力の拡張と科学技術の著しい進歩の結果、20 世紀に入って世界はますます一体化した。これに伴い、地球上には豊かな地域と貧しい地域のコントラストや、文明と野蛮の対比や白人と有色人種の間の人種差別といった西洋中心的な知的枠組が成立していった。マシャードと漱石の作品が類似しているのは、いずれも突然、永年の眠りから叩き起こされて、有無を言わずそうした体系の影響下に組み込まれ、近代化のレースに巻き込まれた新生近代国家に生まれ、その激動を生き抜き、その経験を作品の中に書き込んだからなのである。二人の文学がともに西洋から発信された近代化の波に襲われた周辺国の人間の遺した文芸であることを考えれば、マシャード・デ・アシスは日本の漱石であり、夏目漱石は

日本のマシャード・デ・アシスとも言うことができる。柄谷行人は漱石が世界で読まれていくことの重要性について大変興味深いことを言っている。それは、『日本近代文学の起源』がよく理解できる、なぜならそれはブルガリアで起こったことだから」という日本文学を研究しているあるブルガリア人の言葉を引用し、「漱石が問題にしたことは、どこでも起こったし、今後にも起こることだと言える。そうすると、いわばどこにも「漱石」が居るのではないかと思う」と発言している<sup>30</sup>。すなわち、こうした経験は日本とブラジル二国、あるいは漱石とマシャードのものだけではなく、19世紀の西欧中心的な近代化を強いられた諸地域の間人ならだれもが経験したことだったのだろう。だから柄谷氏の言うように、マシャードや漱石はおそらく世界のほかの国々にも存在している。これは言うてみれば、間テクスト性ではなく、それぞれの社会が置かれていた地政的な状況という観点による比較文学だということができる。『近代日本の誕生』を執筆したイタン・ブルマは非常に面白いことを言っている。

日本近代史は、ペリー提督の黒船来航で幕を開ける。私が日本近代史に興味を持ったのは、他の国とは違った特異性があるからではない。まったくの逆だ。日本近代史の面白さは、世界中の至る所で起きた出来事と共通点が多いことにある。19世紀半ばに日本がぶつかった問題は、ヨーロッパ以外の国ほとんどすべて（および一部のヨーロッパ諸国）が直面した問題だった。強力な外国文明が迫ってきて、自国の政治制度や宗教的習慣、文化的伝統が破壊されそうになったとき、人はどう行動するのだろうか？ こうした実存的問題に、日本人は江戸末期から明治初期にかけて直面したわけだが、これはそんな特殊な問題ではない。ほぼ同じ問題に、今日ではアラブ人やアフリカ人、イラン人、中国人、インド人など、多くの人々が頭を悩ませている。

社会構造をバラバラにせず国を近代化するには、どうすればよいか？ 自分自身を見失うことなく他者から学ぶ方法はあるのか？ 夏目漱石は、日本人が西洋文明を呑み込むのに急ぎすぎるのはよろしくないと言ったが、集団的消化不良に陥らずに呑み込む方法はないものだろうか？ (…)

競争が激しさを増し、国際関係がますます複雑に絡み合い、国家存亡の危機が高まる世界。そんな世界を生き抜くために自己変革に挑戦する国家が、どんな挫折を味わい、大惨事を経験し、勝利をつかむのか。そのすべてが、日本近代史にはドラマチックな形で非常によく現れている。日本の歩んできた道は特異なものかもしれない。しかし、この約百年間に日本が直面した問題は、決して特異なものではない<sup>31</sup>。

近年、ポストコロニアル文学ということが言われる。その観点から考えれば漱石の文学は、

小森陽一氏らが指摘するように、植民者すなわち侵略者の文学となる。だが、おそらくブラジル文学に関しては、旧宗主国に対する植民地ブラジルの文学というとらえ方が為されるのが自然である。ここで注意したいのは、これだけの共通意識が通底している漱石の文学とマシャードの文学が、一方は支配者の文学、もう一方は被支配者の文学というように、ポストコロニアルの観点からは対照的な位置関係に置かれてしまうことである。これはなぜなのだろうか。おそらくそれは、地球規模で起こった帝国主義的現象は、支配者—被支配者という単純な二項関係では語れるものではなく、まさに『プラス・クーバスの死後の回想』で描かれていたような連鎖体系として捉える必要があるからで、漱石の文学を日本のアジア侵略という視点から読む行為も、ブラジル文学を被支配者の文学と捉える行為も、その連鎖体系の一部を切り取った結果なのである。つまり、いずれにも西欧から受けた帝国主義の自己政策化した状況が描き込まれていることからわかるように、これらの文学は、「支配者—被支配者」という単純な構図で捉えることは禁物であるばかりでなく、そうした構図の中で語りきること自体が不可能なのであろう。また、帝国主義ないしは植民地主義というテーマだけで語れるものでもなく、その分析には科学万能主義、進歩主義や進化論、人種問題といった近代化にまつわるさまざまな問題意識も必要となる。となれば、これは「ポストコロニアル」的視点を超え、西洋中心的な近代化に端を発したグローバリゼーション現象全体に拘わってくる話であることはすぐに想像がつく。すなわちマシャードと漱石の親和性は世界が一体化した結果生じたものであり、さらにここから言えることは、この地球規模の近代化により生じた世界一体化現象によって、すでにこの時代から文学のグローバリゼーションも始まっていたということなのかもしれない。

<sup>1</sup> 『東京外国語大学論集』第65号、2003年。

<sup>2</sup> 第2、5～7章のもとになっている初出論文はいずれも本研究により発表したものである。

<sup>3</sup> 武田「南米大陸に果てたナポレオンの「妄想」マシャード・デ・アシスとパラグアイ戦争」（『東京外国語大学論集』第69号、2004年）、p. 93。

<sup>4</sup> 武田「エゼキエルの預言寓意小説としての『ドン・カズムーロ』の重層性」（『総合文化研究 vol. 7』、東京外国語大学総合文化研究所、2003年）、pp. 45-46。

<sup>5</sup> 柴田『漱石のなかの〈帝国〉』、pp. 53-56。

<sup>6</sup> 武田「南米大陸に果てたナポレオンの「妄想」を参照。

<sup>7</sup> 柴田、上掲書、pp. 150-151。

<sup>8</sup> 柴田「陰画としての〈西洋〉—『門』と帝国主義」（『東京外国語大学論集』第70号、2005年）p.259。

<sup>9</sup> 武田「南米大陸に果てたナポレオンの「妄想」」、p.99。

<sup>10</sup> 「〈越境〉する漱石—近代日本—『坊ちゃん』をめぐって」、（『総合文化研究 vol. 7』、東京外国語大学総合文化研究所、2003年）、p. 93。

<sup>11</sup> 夏目漱石「現代日本の開化」in 『私の個人主義』（講談社学術文庫、東京、1989、20刷）、p. 61。

<sup>12</sup> Gledson, John. *Machado de Assis: impostura e realismo: uma reinterpretação de Com Casmurro* (tradução Fernando Py).



São Paulo: Companhia das Letras, pp. 105-106.

<sup>13</sup> 柴田、前掲書、第三章「〈光〉と〈闇〉の狭間で—『三四郎』と近親相姦」を参照。

<sup>14</sup> Idem., p. 76.

<sup>15</sup> Idem., pp. 143-144.

<sup>16</sup> 武田「近代国家ブラジルに捧げられた反・建国神話—『エサウとヤコブ』の寓意性についての一考察」、(『東京外国語大学論集』第 70 号、2005 年)。

<sup>17</sup> 柴田、前掲書、pp. 171-172.

<sup>18</sup> Gledson, John. Machado de Assis Ficção-E-História. Rio de Janeiro: Paz e Terra, 1986, p. 81.

<sup>19</sup> 柴田「〈越境〉する漱石・近代日本」『坊ちゃん』をめぐって」, p. 85

<sup>20</sup> Pereira, Astrojildo. Machado de Assis – Ensaio e Apontamentos Avulsos -, Rio de Janeiro: Livraria São José, 1958, p. 47.

<sup>21</sup> 柴田『漱石の中の帝国』, p.21.

<sup>22</sup> 詳しくは武田「エゼキエルの預言」、「近代国家ブラジルに捧げられた反・建国神話」、「憂愁の挽歌—『メモリアル・デ・アレイス再考—』」(『東京外国語大学論集』第 72 号、2006 年)を参照。

<sup>23</sup> 柴田、前掲書、p. 66, p. 149, p. 223.

<sup>24</sup> Idem., pp. 244-245.

<sup>25</sup> Idem., p. 66.

<sup>26</sup> 小森陽一『漱石を読み直す』(ちくま新書、1995)、p. 86.

<sup>27</sup> 石原千秋『漱石の記号学』(講談社選書メチエ、1999 年)、p. 77.

<sup>28</sup> 小森、前掲書、p. 86.

<sup>29</sup> 『キンカス・ボルバ』は、実証主義や進化論や自然主義などを信奉する科学万能主義への批判がうかがえる。詳しくは拙論「ソフィアの謎—『キンカス・ボルバ』のソフィア像についての一考察—」(『東京外国語大学論集』第 65 号、2003 年)を参照。

<sup>30</sup> 『漱石研究 1 号』(翰林書房、1993 年)、p. 34.

<sup>31</sup> イアン・ブルマ著・小林朋則訳『近代日本の誕生』(ランダムハウス講談社、2006) pp. 7-8.

## Machado e Sôseki

– Afinidades entre dois contemporâneos antípodas –

TAKEDA Chika

Este é um artigo que conclui uma série de estudos da literatura comparada entre Machado de Assis (1839-1908) e Sôseki NATSUME (1867-1916), promovidos desde 2003, com a colaboração do prof. Shoji SHIBATA da literatura japonesa. Entre as obras de Sôseki, considerado um dos maiores escritores modernos do Japão, e de Machado, contemporâneo dele, se encontram várias afinidades que não se restringiam às temáticas privilegiadas nem ao repertório retórico. Como é muito difícil imaginar que tenha existido um intenso intercâmbio cultural entre os dois países, o Japão e o Brasil, naquela época, e conseqüentemente entre os dois escritores, surge um mistério intrigante: por que essas afinidades. A partir dessa pergunta é que começou a referente pesquisa conjunta.

Através dos estudos, foi revelado que os dois se utilizam do mesmo método literário, a alegoria, para descrever as sociedades em que viviam. E o interessante é o fato de as semelhanças entre eles residirem exatamente nessas descrições. Isto significa que as afinidades entre as obras de ambos podem se atribuir à época e às circunstâncias internacionais em que os dois países se colocavam. O século XIX foi o tempo em que as potências ocidentais expandiram sua influência conforme o princípio imperialista, envolvendo conseqüentemente e de maneira direta os países que até então viviam isolados ou quase isolados do sistema internacional. Os dois nasceram numa época de transição: Machado nasceu às vésperas do Segundo Império, viveu na plena mudança; Sôseki nasceu às vésperas da Restauração de Meiji e também viveu no intenso período de transição da pré-modernidade para a modernidade, ambos nas capitais de seus países. Foram o fundo histórico semelhante e as situações geopolíticas do Brasil e do Japão que aproximaram estes autores.

E esta pesquisa sugere um ponto de vista muito inressante da literatura comparada. As semelhanças entre as obras de Sôseki e Machado não são oriundas da intertextualidade, mas de, digamos, uma rede geopolítica em que o Japão e o Brasil se encontravam naquele tempo. Isto é um elemento importante que se deve levar em conta ao considerar a literatura que nasceu depois de o mundo ter experimentado o movimento da globalização.